●国際連合大学 2016-2017 年国際教育交流事業●

中国政府日本教職員招へいプログラム
実施報告書

北京市・安徽省・上海市

2017 年 5 月 16 日(火) ― 5 月 23 日(火)

国　際　連　合　大　学（ＵＮＵ）
公益財団法人ユネスコ･アジア文化センター （ＡＣＣＵ）

●国際連合大学 2016-2017 年国際教育交流事業●

中国政府日本教職員招へいプログラム
実施報告書

北京市・安徽省・上海市

2017 年 5 月 16 日(火) ― 5 月 23 日(火)

国　際　連　合　大　学（ＵＮＵ）
公益財団法人ユネスコ･アジア文化センター（ＡＣＣＵ）

はじめに

国際連合大学（UNU：United Nations University）は、アジア太平洋地域の教職員や教育分野の専門家等の資質の向上と相互理解の促進を目的として、2002 年より日本政府の拠出金をもとに「日本国際教育交流プロジェクト」を実施してきました。国際連合大学はこの一環として、交流事業を公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU：Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO）へ委託し、広く展開しています。

2002 年から始まった「国際教育交流事業」では中国教職員の招へいプログラムを実施しており、これまでに延べ 1,628 名の中国教職員を日本に招へいしてきました。

翌 2003 年からは上記プログラムと対をなすものとして、毎年 10 名程度の日本教職員を中国へ派遣してきました。これらの交流事業の成果が中国政府に評価され、日中国交正常化 35 周年を記念する 2007 年からは中国の教育部による招へいプログラムとして、参加人数を倍増し、日中教職員相互交流のさらなる発展を目指して実施されるようになりました。

このたびの「中国政府日本教職員招へいプログラム」は、2017 年 5 月 16 日から 5 月 23 日に実施され、昨年中国教職員の受け入れにご協力いただいた自治体や学校の教職員、次期受け入れを予定していただいている自治体や学校の教職員、日中間の教職員交流に高い関心を持ち、公募により選抜された教職員等、計 25 名が参加しました。

参加者は北京市で中国教育部による同国の教育事情や制度について説明を受けたのち、安徽省と上海市での教育行政機関、学校および教育文化施設等の訪問を通して、中国における教育の現状と課題、訪問都市の教育の特徴、及び両国における教育課題の共通点と相違点について学ぶとともに、中国の教職員、児童生徒との交流を図ることができました。

このたびの訪問が、中国の教育や文化に対する参加教職員の理解を深めることはもとより、帰国後の諸活動を通じて日中の教員間、学校間の交流のいっそうの発展に役立つよう願ってやみません。

最後に、このプログラムにご支援とご協力をいただきました、中国教育部、中国駐日本国大使館、文部科学省、及び、安徽省教育庁、訪問先の各学校をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2017 年 8 月

国際連合大学
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

目　次

１．実施概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

２．表敬訪問・歓迎会・交流会・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

３．学校訪問・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

４．歴史と文化訪問・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27

５．成果と今後への活用
A グループ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
B グループ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
随行者のコメント・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45

付録　1.実施要項・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
2.日程表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
3.参加者リスト・関係者リスト・・・・・・・・・・・・ 52
4.過去のプログラム実績・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54
5.写真・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55

1. 実施概要

実施期間　2017年5月16日～5月23日　(8日間)

今回のプログラムでは、中国教育部、安徽省教育庁の協力を得て、北京市で1校、安徽省合肥市で4校、上海市内で1校の学校を訪問した。各訪問地では、中国教育部表敬訪問、安徽省教育庁との交流会、学校訪問に加え、訪問校の教育関係者との意見交換や文化遺産・文化施設等の見学を通じて教育交流を行い、そこから多くを学び取り帰国した。

参加者構成

今回の訪問団の参加者の構成は、以下のとおりである。2016年11月～12月に実施された中国教職員招へいプログラムの受入自治体である、奈良県奈良市教育委員会から選出された教職員、2017年秋に訪問する神奈川県横浜市教育委員会から選出された教職員、一般公募により選ばれた教職員を合わせ、合計21名の参加となった。このほか、国際連合大学と文部科学省の代表者、およびユネスコ・アジア文化センター職員の計4名が同行し、合計25名が日本教職員訪問団として中国へ向かった。

オリエンテーション

出発前日の5月15日、参加者らは東京都内のホテルに集合し、事前オリエンテーションを行った。オリエンテーションでは、本プログラムの主催者である国際連合大学大学院事務局長の古田知美氏、文部科学省初等中等教育局特別支援教育調査官の萩庭圭子氏、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター人物交流部部長の進藤由美があいさつをした。

続いて文部科学省生涯学習政策局参事官付専門職の新井聡氏より、中国の教育概要、近年の教育改革の動向についてなどの講義があった。参加者がそこで得た知識は、中国訪問中、現地での見聞を深めるための基礎知識として大いに役立つものとなった。

その後、情報共有会の時間も設けられ、プログラム中の役割分担などについて話し合った。

第1日　北京到着

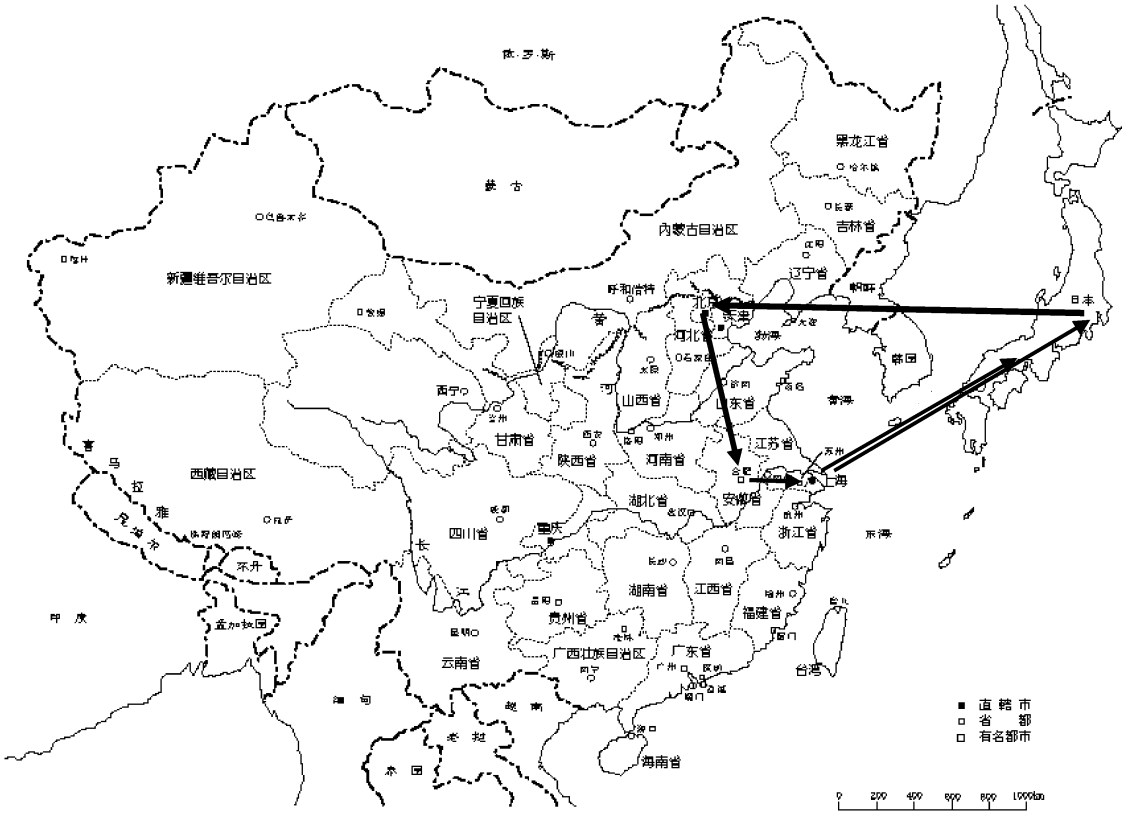
5月16日早朝、日本教職員訪問団25名は羽田空港から北京に向けて出発した。北京首都国際空港では、今回最終日まで訪問団に同行し、通訳を務めた安徽大学外語学院副教授の王永東(WANG Yongdong)氏の出迎えを受けた。王氏と合流した一行は、専用バスで北京市内へ向かい、明・清時代の皇帝が五穀豊穣を願って祭祀を行った場所である天壇公園を見学した。

第2日

中国教育部表敬訪問・学校訪問　(北京市)

5月17日午前、一行は日本の文部科学省に相当する、中国教育部を表敬訪問した。中国教育部では、はじめに国際協力交流局副局長の王慧(WANG Hui)氏による歓迎のあいさつと、日中間の教育交流についての説明があった。続いて訪問団を代表して、国際連合大学大学院事務局長の古田知美氏があいさつし、今回の教育交流を通じて、友好関係を育み、大きな成果を得られることを楽しみにしている、と述べた。次に、基礎教育局高等学校教育処長の王岱氏より中国の基礎教育について、教師工作局総合処長の宋磊氏より教員の育成システムについての説明があった。最後に質疑応答の時間があり、初等中等教育にかかる費用や中国への帰国児童・生徒への対応についての質問が出た。

昼食をはさみ、北京光明小学校を訪問した。同校は、1960年に北京市東城区に創立され、「健康、知恵のある児童の育成」を教育目標としている。低学年キャンパスでは、それぞれ「香・萌・遊・彩・美・和」と名付けられた教室を見学し、同校の徹底した教育方針に訪問団は感銘を受けた。



第3日

安徽省教育庁歓迎会・交流会　（安徽省）

5月18日早朝、一行は空路で北京から安徽省合肥市に移動した。合肥市に到着すると、安徽省教育庁の職員の歓迎を受け、ホテル到着後教育庁主催の歓迎会があった。

はじめに、安徽省教育庁長の李和平（LI Heping）氏による出席者紹介があり、安徽省滞在中楽しく過ごせるように祈っている、とあいさつが述べられた。次に訪問団を代表して、横浜市教育委員会の蛭田 ヤマダ キヨコ ベッティー氏が、お互いに教育について意見交換ができれば嬉しく思う、とあいさつを述べた。その後、李庁長らを囲んで、教育庁の職員と昼食を共にした。

昼食後は、会議室に移動し、教育庁との交流会があった。交流会は、昨年11月に中国教職員招へいプログラムで団長として来日した外事部の丁育紅（DING Yuhong）氏の司会のもと進められた。はじめに庁長の李氏から安徽省の基礎教育について紹介があり、同省は中国国内において中級都市であり、経済発展の中「教育」を重視していること、基礎教育段階の児童生徒が1千万人程度いることなどが紹介された。訪問団からは、「良い教員とはどのような教員か」、といった

《中国の教育に関する基礎データ》

◆中国の総人口 13.76 億人　＊2016 年データ、
出典：日本国外務省
http://www.mofa.go.jp/mofaj/index.html

	学校数	生徒数	教員数
小学（小学校）	190,500	96,921,800	5,489,400
初中（中学校）	52,400	43,119,500	3,976,300
高中（普通高等学校）	13,200	23,744,000	2,543,200
特別支援学校	2,053	442,200	－

＊2015 年データ
出典：中国教育部 http://www.moe.gov.cn/

◆訪問都市の人口と面積

北京市（2015 年統計）

面積	16,410.54 ㎢
常住人口	2,170 万 5,000 人

安徽省（2015 年統計）

面積	139,400 ㎢
人口	6,949 万 1,000 人

上海市（2015 年統計）

面積	63,405.5 ㎢
人口	2.415 万 2,700 人

出典：JETRO 中国エリア別情報

質問があがり、中国側より「優れた教員とは、知識だけでなく優れた道徳を身に付けていて、児童生徒に応じた教育ができる教員である」、との返答を得た。最後に記念品を交換して交流会を終えた。

その後、合肥屯溪路小学校を訪問した。同校は、「図書館の中にある学校」を謳い、読書環境の創成に力を入れている。訪問の最後に行われた交流会では、「図書館の中の学校をつくろう」をテーマに交流した。

第4日　学校訪問　（安徽省）

5月19日午前、訪問団一行は3校目の学校となる合肥市特殊教育センターを訪問した。同校は、視覚障がい・聴覚障がい・知的障がいの児童生徒を対象とし、就学前教育、9年間の義務教育、総合高校教育を行っている。生徒による歓迎会では、民族楽器の演奏、武術、舞踊などが披露された。

午後は、合肥第八中学の高等部を訪問した。到着後、一行は同校の食堂に通され、日頃同校の教職員が食べているという食事をとった。その後、3,000名の生徒が生活している寮や、生徒による茶芸の実演、国際ロボットコンテストで優秀な成績を収めているロボットサークルなどを見学した。

次に、合肥市第五十中学の中学部を訪問した。校長の江涛（JIANG Tao）氏による学校概要説明の後、校庭で行われていた同校の文化祭を見学した。

第5日　合肥市内視察（安徽省）

5月20日午前、一行は安徽省博物館を訪問した。博物館の入り口に展示された銅画「皖风徽韵」には、中国仏教の聖地である九華山や揚子江などが画かれ、その大きさや繊細さに圧倒され、見惚れる参加者もいた。「徽州古建築」「安徽文房四宝」「新安画派」「江淮揮珍」の４つの展示は、安徽省の文化を理解するのに役立った。

昼食をはさみ、三河古鎮を訪問した。三河古鎮は約2500年の歴史をもつ水郷である。交通の要所として栄え、現在は観光地としても知られている。一行は、ガイドの説明を聞きながら見学し、小南河をボートで遊覧し、町並みを楽しんだ。

第6日　上海市内視察（上海市）

5月21日朝、訪問団は最後の目的地、上海へと向かった。上海到着後、一旦ホテルに立ち寄り昼食をとった後、午後は2010年の上海万博時の建物を利用した大型美術館、中華芸術宮へ向かった。「清明上河図」などの迫力満点のCG映像作品をはじめ、中国の近現代美術など数多くの作品が展示されており、見ごたえのある美術館であった。

続いて上海のシンボルタワーともなっている東方明珠塔に向かった。1階にある上海城市歴史発展陳列館で上海の近代史についての展示を見学した後、地上263メートルと259メートル地点にある展望台で、眼下に広がる外灘や黄浦江を行き交う船などを見学した。床が透明で自身の真下を見下ろすことができるエリアでは、写真撮影に興じる様子があった。夕食は、267メートル地点にあるレストランでディナーブッフェを楽しみ、国際都市、上海を満喫した。

第7日　上海市内視察

5月22日は、6校目で最後の訪問校となる上海市甘泉外国語中学を訪問した。同校は、中高一貫の公立校で、上海市で日本語を第一外国語とする唯一の中等教育機関である。高校1年生の日本語の授業に参加した一行は、生徒の日本語のレベルの高さや、通訳者育成のために設置されたという同時通訳ブースが設置された会議室などを見学し、充実した施設に驚いた。

同校をあとにした一行は、豫園にあるレストランで小龍包の昼食をとった。その後、豫園や南京東路を自由に散策し、思いおもいの時間を楽しんだ。

第8日　帰国

5月23日早朝、参加者たちは上海浦東空港に向かい、空港にて解散、各帰国地に合わせて東京、大阪の各空港へ向かって帰国の途に着いた。

2.
表敬訪問
歓迎会・交流会

中国教育部表敬訪問［北京市］
安徽省教育庁歓迎会［合肥市］
安徽省教育庁交流会

訪問団は、日本の文部科学省に相当し、北京市にある中国教育部を表敬訪問し、安徽省では、教育委員会に相当する安徽省教育庁と交流した。中国教育部では、留学生交流、中国人生徒の日本語の専攻状況、日中の青少年交流を例に、日中両国間の教育交流が盛んに行われていることなどが紹介された。安徽貴省教育庁の交流会では、安徽省では経済発展の中、教育を重要視していることが庁長より紹介された。

中国教育部表敬訪問

[北京市] 5 月 17 日(水)

中国教育部は 1998 年 3 月に旧国家教育委員会が改称されて置かれた中国の中央政府の組織である。中国の教育全般を総括し、日本の文部科学省にあたる。教育の基本方針・政策、諸基準を制定し、中央各部委員会および地方を指導する。

プログラムの第 2 日の 5 月 17 日（水)、日本教職員訪問団は中国教育部に表敬訪問を行った。訪問には、在中国日本大使館から、参事官の横井理夫氏が同席した。概要をプログラムの流れに沿って以下に示す。

◆中国教育部出席者紹介およびあいさつ

はじめに王慧（WANG Hui）氏より教育部の出席者の紹介があった。出席者は以下の通りである。

・国際局副司長 王慧氏
・基礎教育局高等学校教育処長
　王岱（WANG Dai）氏
・教師工作局総合処長
　宋磊（SONG Lei）氏
・国際協力交流局アジア・アフリカ処長
　朱莉（ZHU Li）氏
・国際協力交流局プログラムオフィサー
　顧秋利（GU Qiuli）氏

続いて王慧氏より、歓迎のあいさつがあった。内容は以下の通りである。

日中の教育連携は 2016 年 1 月に行われた第 1 回日中韓教育大臣会合においても連携の拡大を確認された。また、2016 年 6 月には文部科学大臣(当時)の馳浩氏が中国を訪問し、大学教授や学生との交流を持った。以来、ハイレベルな人材交流を目指し、連携を進めてきた。

そうした連携を現在は言語、青少年、高等教育の 3 つの観点から進めている。言語の面では、中国では日本語は第二外国語として選択されることが大変多い。立命館大学をはじめとする学校と孔子学院とが連携を結び、言語を中心とする交流を進めている。青少年レベルの交流としては、現在中国からは約 1 万名の高校生が日本に訪問しており、サッカーや職業教育を通した交流をしている。高等教育の分野では、大学の単位の相互認定や日中の学校長会議などを通して連携を深めている。

その後、訪問団を代表して、本事業の主催

者である国際連合大学より、大学院事務局長の古田知美氏があいさつし、訪問についての謝意と期待を述べた。

◆中国の基礎教育について

次に、基礎教育局高等学校教育処長の王岱氏より、中国の基礎教育についての説明があった。内容は以下の通りである。

中国では教育の均等化を行っている。均等化は平準化、相互連携、ハイレベルな教員育成など、いくつかの方法によって行われている。平準化は学校建設、学校管理の方法によって実施している。相互連携については、地方の比較的財政的基盤の弱い学校と連携して教育を開発する「教育建設プロジェクト」によって行っている。

また、基礎教育の今後の発展する方向性としては、農村の教育の質の向上、義務教育の平準化による教育の公平さの確保、貧困地域での教育の充実、特色ある学校づくりの４つがあげられた。

◆教員の育成について

教師工作局総合処長の宋磊氏より、教員育成についての説明があった。内容は以下の通りである。

現在、師範大学、総合大学において開放的な教員養成を行っている。2007 年から師範大学生への国費での就学支援を行っている。これは、国費で学費を支援するのと引き換えに農村部での教育活動を一定期間行うもの。本人が希望すれば、現地で教員としてその後も活動することができる。

2012 年には教員教育の基準システムの作成、2014 年には卓越した教員の育成に関するプログラムが開始するなど、教員教育に関しての改革が続いている。

貧困地域での教員の確保については、先述の師範大学での取り組みに加え、そうした地域の教員には給与に加えて補助金を出している。教員育成においては、管理、技能、技術の３つの点を重視している。

◆質疑応答

Q:中国の国語教育において、「伝統文化」に関する教材はどのようなものがあるか。基準はあるか。

A:教育部では伝統文化に関する指導要綱を配布している。具体的には、論語などの中国の古典的な詩と文章が含まれている。また、歴史においては四大発明、史記が伝統文化に関する教材として設定されている。

Q:高校のカリキュラムは、都市部と農村部とではどのように異なるか。

A:全て統一されたカリキュラムの下で教育を行っている。

Q:義務教育は無償だと思うが、修学旅行や給食などにかかる費用はどのくらいか。支払えない場合の支援はあるか。

A:義務教育の財政については地方が担当しているため、地域差がある。平均的に、1 年でおよそ１万４千元ほどかかる。

Q:学校における心理カウンセリングはどのようになっているか。

A:カウンセリングは道徳の担当者が行っている場合が多い。道徳の教員は児童生徒のカウンセリングだけでなく、保護者に対するカウンセリングも行う。

Q:海外からの帰国児童生徒に対する支援は行っているか。

A:帰国児童に対して、特別指導をする場合もある。中国語だけでなく、英語で授業する民弁大学があり、進学には複数の選択肢がある。

Q:教育や教員の質とは何か。教員の採用基準はあるか。不登校の児童生徒に対する対策はしているか。

A:教員免許制、学歴、師範大学の学生の育成、教員のトレーニングにより、優秀な教員の採用と育成に取り組んでいる。毎年 20 億元を投じで、農村地域の教員をトレーニングしている。また、教員免許を更新するには、5 年間で 360 時間以上の研修を履修する必要がある。

（高野　慎太郎・島ノ江　正浩）

《参加者の感想》

ヤマダ　キヨコ　ベッティー・・・・・最初に教育部に表敬訪問ができたことは大きな意味がありました。中国の教育理念、制度、事情等教えていただき、中国の学校、児童・生徒・保護

者・教職員についての質問にも答えていただきました。学校訪問に向けて知識を深めることが出来ました。

佐久間　勇史・・・・・・・・・中国は最大の発展途上国であり、今後も多くの先進国の協力を得ながらさらに発展していきたいという趣旨の話がとても印象に残りました。中国の現状をしっかりと見据え、国全体のことを考えながら教育の推進に努めている姿勢が大変素晴らしいと感じました。私の教育に対する考え方や中国観に大きな影響を受けました。

佐野　純・・・・・・・・・中国国内の教育について、国家のレベルでどのように考え取り組んでいるのか、教育部の方々から直接お話を聞く機会は非常に貴重だったと感じた。その中で近年日本との関わりが深まってきていること、多くの人の行き来があることを具体的に知ることができ、日本の教員の方々のお話と重なった。また個人的にも質問をすることでき、国家的に教育の質を高めることに力を注いでいること、教育庁との取り組む範囲の違いなどを学ぶことができた。

高野　慎太郎・・・・・・・・・中国における基礎教育の在り方について多くの情報を得ることができた。とくに印象深いのは、＜教育の均等化＞の話題。具体的には、＜教育の均等化＞は教育の平準化、相互連携、ハイレベルな教師育成等の方法によって行われ、平準化は学校建設、学校管理によって行う。相互連携については、地方の比較的財政的基盤の弱い学校と教育部が連携して教育を開発する「教育建設プロジェクト」を行っていると聞いたが、実際、どの程度のレベルで教育の平準化が実施されているのかはわからなかった。私たちが訪問したのはいわゆるエリート校だったが、こうした学校が中国全土でどれほど平準化しているのか、また、農村部の学校教育がどのようなものなのか、という点について疑問が残る。今後、再度中国を訪れるなどして明らかにしたい。

大栗　真佐美・・・・・・・・・中国政府の推進している教育事情がよく理解できた。日本側の教員の質問事項にしっかりと返答していただき、これまでの教育についての成果と課題などがわかった。話を直接聞くことができて、日本と中国の教育を比較して考えたり、参考にしたりと今後に生かすことを考える機会となった。

安徽省教育庁歓迎会

[合肥市] 5 月 18 日(木)

安徽省は清代初頭、1667 年に設置され、華中地域に位置する。地名は安慶の安、徽州の徽による。北東部は江蘇省、南東部は湖北省、西北部は河南省と接しており、下部に 16 地級市を管轄する。人口は約 7 千万人、面積は約 14 万平方キロメートルであり、揚子江、淮河、青弋江などの河川や、黄山、九華山、天柱山などの山々を有し、工業、農業、イノベーションを中心に栄えている。

大学が集中していることも魅力の 1 つで、教育や文化的にも発展しやすい環境であるため、中国国内における総合イノベーション地域としても注目されている。

合肥市滞在中の宿泊先でもあった合肥天鵝湖酒店のレストランにて、安徽省教育庁の歓迎会があった。

はじめに安徽省教育庁長の李和平（LI Heping)氏よりあいさつがあった。李氏は、5 月 14 日～15 日に北京で開かれた「一帯一路首脳会議」に注目が集まる中、ここ安徽省に来られたことを歓迎する。滞在中、有意義な時間を過ごせるように祈念する、と述べた。

次に、訪問団を代表して、横浜市教育委員会

事務局指導部国際教育課の蛭田 ヤマダ キヨコ ベッティー氏があいさつした。ヤマダ氏は、安徽省の教職員および児童生徒との交流を通じて、互いに教育について意見交換ができれば嬉しく思う、と述べた。

李氏の乾杯の音頭で歓談が始まり、先方の計らいにより、上着を脱ぎ、ネクタイを外した出席者らは、リラックスした雰囲気の中、食事と交流を楽しんだ。

（榮谷　智之・山﨑　一以）

安徽省教育庁交流会

[合肥市] 5 月 18 日(木)

歓迎会に続き、ホテル内の会議室にて安徽省教育庁との交流会があった。

◆安徽省における基礎教育の現状

はじめに、庁長の李氏より安徽省の基礎教育の現状につて説明があった。内容は以下の通りである。

安徽省は 3 つの河と 3 つの山に恵まれた、自然豊かな場所である。農業だけでなく、最近ではイノベーションの都市として認知されている。大学が多く、中国の 4 大イノベーション都市のひとつに数えられる。中国の、山あり、水あり、文化ありという都市の在り方の代表的な都市である。日本では高知県と姉妹都市の交流を行っている。経済的な面だけでなく、教育においても交流を持っている。

安徽省には 1 万 9 千校の学校があり、930 万人の児童生徒がいる。教員は 54 万人である。就学前教育の普及率は 80.4 パーセントである。就学前教育の実施は法的に決まっている。安徽省内での 9 年間の義務教育の普及率はおよそ 100 パーセントを達成している。

現在は、教育の質の均等化に取り組んでいる。均等化とは、都市と都市、都市と農村の間の教育の質の均等化である。そのために、教員の質の向上に取り組んでおり、具体的には、資金の投入や情報化（ICT）技術を使っての授業や教員研修を行っている。現在、施設面の格差は徐々に小さくなってきたが、本当に重要なのは優れた先生が学校にいることである。日本の経験も参考にしており、教職員の管理については、まだまだ日本から学ぶべきところがある。

キャリア教育については、進路の多様化、選択化が生じている。現在、高等学校への入学率は 90 パーセントを超えている。高等学校以降は進路が分岐するが、キャリア教育としては職業専門学校に力を入れている。大学は 109 校あり、150 万人が学んでいる。

◆総合改革について

義務教育の計画は県、学校の設置は国が担当している。学校への教員配置については、優れた経験をもつ日本に学んでいる。中国では教員は公務員ではないが、公務員と同等の待遇である。貧困地域などで働く教員は特別手当が与えられる。三通政策（インターネット、情報、道）を通して、情報の土台を作り、児童生徒や教員にもサービス提供している。安徽省では、教員が不足している地域があるため、インターネットを通してオンラインにより反転授業も行っている。安徽省の特徴的な施策の 1 つであり、教育の質の均等化に役立っている。

◆質疑応答

Q：質の高い教員とはどのような教員か。

A:一概には言えないが、優れた教員とは、徳を持っていること、知識を持っていること、児童生徒の個性によって対応を変えることができることが求められる。研究心が高く、知

識があっても生徒に正しく伝えられないなら良い教員ではない。

Q:職業教育について、日本の中学校の技術科では、木材・金属・機械・電気の４つの分野を学ぶ。中国の職業教育ではどのような分野を学習しているか。

A:安徽省の中等職業学校では必須科目である。キャリア教育として中等職業学校にて必須で行っている。具体的には、職業指導を行っている。

◆記念品交換

安徽省教育庁からは、中国独特の工芸品であり、安徽省蕪湖市が産地である鉄画を頂いた。訪問団からは、富士山が画かれたペアの招き猫を贈った。

（高野　慎太郎・吉川　直和）

《参加者の感想》

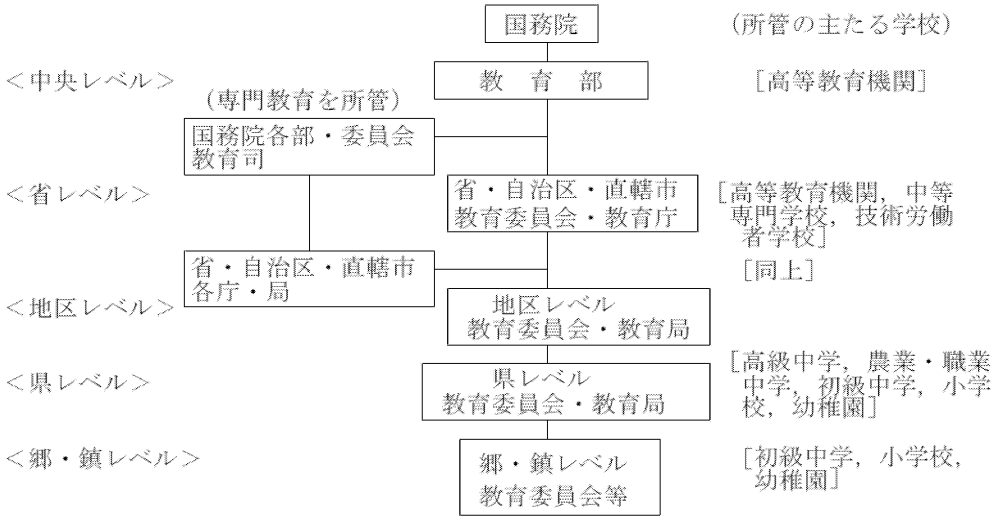
ヤマダ　キヨコ　ベッティー・・・・・とても温かく迎えていただきました。教育に関して抱えている課題を話して下さり、質問には正直に答えてくれたため貴重な情報を色々と得られました。自由に交流が出来ましたが、お互いに言葉が通じない時にはとても残念に感じました。

高野　慎太郎・・・・・・・・安徽省教育庁においては、教育の平準化、中国のキャリア教育の実情について話を伺えたのが有意義であった。中国教育部においても話題となっていた「教育の平準化」は安徽省においては、都市と都市、都市と農村の間の教育の質を平準化することを意味する。このために、教師の質の向上に取り組んでおり、具体的には、情報化（ＩＣＴ）技術を使っての授業や教員研修を行っているとのことであった。教育の平準化を目指してのさまざまな施策が省レベルでおこなわれていることがわかった。一方で、こうした取り組みがどの程度実際化しているのかという点については今後明らかにしたい。

キャリア教育については、現在の安徽省では進路の多様化、選択化が生じている現状がある。現在、高等学校への入学率は90パーセントを超えている。高等学校以降は進路が分岐するが、キャリア教育としては職業専門学校に力を入れている。「キャリア教育」という名称を用いていても、日本と中国においてはその意味内容に多少の差異があると感じた。日本においては「生き方を考える教育」を意味し、中国においては「職業教育」を意味しているようであった。日本においても、キャリア教育概念は職業指導→職業教育→進路指導→キャリア教育との変遷をたどってきた経緯を踏まえれば、今後の中国においてもキャリア教育概念の変容が見られることが予想される。この変容のきっかけとして、現在生じつつある高等教育以後の就職難がきっかけとなることも予想される。この点について、今後の調査を課題としたい。

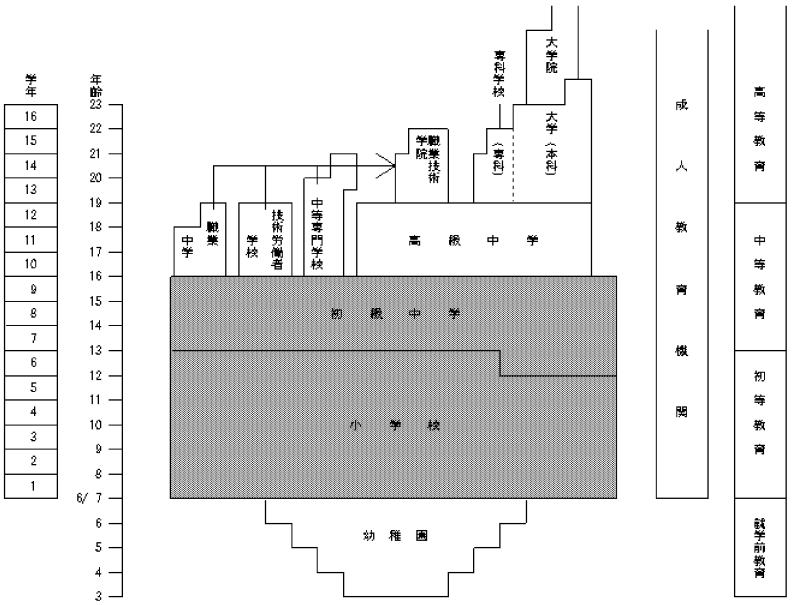
◆　中国の教育行政について

現行の教育行政系統



出典：文部科学省（2013）教育調査第 146 集『諸外国の教育行財政』

◆　中国の教育系統図



出典：文部科学省（2016）教育調査第 150 集『諸外国の初等中等教育』

3.

学校訪問

北京光明小学校
合肥市屯溪路小学校
合肥市特殊教育センター
合肥市第八中学
合肥市第五十中学
上海甘泉外国語中学

北京光明小学校

［北京市］ 5 月 17 日(水)

学校長：廖文勝（LIAO Wensheng）
設立年：1960 年
児童数：1,844 名

1 年 3 組の授業風景

北京光明小学校は、東城区南東部に位置し、綺麗な龍潭湖に隣接している。1960 年に創立され、北京の中心地に位置するため、現在は本校、低学年キャンパス、広渠キャンパス、和議キャンパスの 4 つのキャンパスに分かれている。「道徳」と「健康」を教育の柱とし、主体性のある児童の育成を目指している。また、高学歴の両親を持つ児童が多く、教育に熱心な地域に位置する。

◆低学年キャンパス見学

「児童を中心に児童のために」をモットーに、児童の特徴に合わせて、4 つのキャンパスを設けている。1・2 年生のみの校舎は、児童のための遊び場をイメージして建てられている。

廊下に図書棚が設置され、たくさんの本が並んでいる。また、ソファなどが置いてあり、子どもたちが自由に本を読める環境になっている。

○授業見学

1 年 3 組では、国語の授業を見学した。詩の音読を元気いっぱい豊かな表情で朗読する子どもたちの姿が見られた。

○教室・施設見学

児童の遊び場（教室）として「香」「萌」「玩」「和」「彩」「美」の 6 つの部屋を紹介していただいた。内容は以下の通りである。

「香」・・・子どもたちが料理をする教室。ケーキ作り等を通して、健康・食育、バランスのよい食事や生活への愛を育てる。
「萌」・・・植物について学習する教室。植物を育てることを通して植物や生命について学ぶことができる。
「玩」・・・玩具を使って遊ぶ教室。ラジコンやレゴブロックなどが豊富にあり、考えながら遊ぶことができる。
「和」・・・裁判の模擬体験をすることができる教室。
「彩」・・・美術の学習を行う教室。
「美」・・・幅広い学習スペースとして活用できる教室。陶芸作りなどを行うこともある。

◆本校キャンパスの見学

○廖文勝（LIAO Wensheng）校長から学校紹介

「光明一生」ー。校名の通り、ずっと明るく過ごしてほしいと願っている。今の小さい子がこれからどんどん成長していく、将来社会の柱となって力を尽くす人に育ってほしいと願っている。

校訓は、「できる」である。「できる」と信じることでできるようになる。温かい心をもち、助け合って明るい社会にしよう。そのためには、教員

の質の向上が必要だ。教員が頑張り続けることで児童の力を伸ばすことができる。

本校では、児童を教育の中心と考えている。

児童・健康・道徳を大切にし、道徳そして知恵のある児童を育てていきたい。また、中国の伝統文化を伝えることを大切にしている。孔子の教えにあるように知識人は道徳がある。道徳と知識の両立は難しいと言われるが可能であると考えているため、教員の道徳の向上を目指している。

自分を明るくすることで、将来的に社会を明るくしようと考えている。

学校のテーマは「道徳」、キーワードは「児童・健康・道徳」の 3 つである。活気のある児童を育てていくことを目標にしている。

中国では学力を重視する傾向にあるが、光明小学校では、道徳を大切にしている。中国の伝統文化の中で、道徳の高い人は皆尊敬される。本当の“人材”とは、優れているだけでなく、道徳が備わっていなければならない。孔子の言葉には、「本当の知識人には道徳も備わっている」という言葉がある。道徳は、社会を明るくする。それは知識を教えるのと同じぐらい大切である。

小学 3 年生からメモをとるトレーニングを行っている。意図としては、概念を養っていくことにある。授業の最初の 3 分間は非常に大切にしている。細かいところから頑張っていきたい。

同校に通う児童の両親は、比較的高学歴である場合が多く、教育に熱心な地域性である。

スポーツの施設も用意している。体も健康にしていきたい。集中できない児童に対して、太極拳コースがあるなど、道徳、伝統文化、生活、スポーツの面に注目して取り組んでいる。

＜学校と家庭がどのように協力し合うか＞

学校と家庭が衝突するときがある。それに対処するのも校長の職務である。これは、教育を発展させる動力になる。保護者に学校に来てもらって、どんな学校か見てもらい理解を深めてもらう。「保護者が何を思っているか」ということを大事にしている。

光明小学の中に入ることで、一生が光明るくあるように、という心情である。

〇訪問団代表挨拶

神戸市立大沢中学校　教諭　小畑幸一氏

低学年キャンパスの見学では、子どもたちが生き生きと学習する姿が見られた。学生を中心にした授業を実践されていることが伝わった。

〇記念品交換

訪問団からは、鳥獣人物戯画の巻物、同校からは、学校のペナントが贈られた。

（榮谷　智之・井口　将夫）

《参加者の感想》

今村　羊生文・・・・・・・・・新しい校舎と生き生きとした児童の姿が印象に残った。廊下や教室には中国の行燈や傘などが可愛く飾られて、児童が楽しく安心して学ぶ環境が用意されていることが伝わってきた。一方で、クラスに設置された監視カメラには驚いた。何かあったときのみに再生をして確認するとのことで、常時の監視ではないと聞いて安心した。また、特別教室の特色ある名前とその質の高さに好感を持った。特に低学年の児童のための「玩」と名付けられたプレイルームには驚いた。学校教育の中に遊びの要素を取り入れることで、心と体のバランスを育もうとする発想が日本とは違っていると感じた。それらの特別教室で学ぶ児童たちの様子も見学してみたかった。見学の後にお茶を飲みながら校長先生からお話をいただいた。特に徳育教育「以徳為先」への強い情熱に感動した。孔子、孟子、老子の 3 善の教えを基盤にして、中国の伝統である徳治主義が活きた形で教育の中に表現され、それを会得し、さらに体得した教員が活躍していることに感銘を受けた。「よい知恵のある教員は、素晴らしい道徳を兼ねそろえている」という言葉が忘れられない。

桑原　昇・・・・・・・・・様々な体験活動によって健全な精神を育もうとする教育方針が明確であり、その方針が特別教室など設備面にまで通底していることに感銘を受けた。調理室や、裁判所を模した部屋などで、児童は豊かな体験をし、豊かな心を育むことができると思う。児童・生徒の全人格的発達を促す教育が、日本だけでなく中国でも求められているということを、肌

で実感することができた。

榮谷　智之・・・・・・・・・4 つのキャンパスがあり、それぞれの特性に応じた教育施設や教育活動をしていることが興味深かった。道徳を大切にし、子どもたち中心の学習という教育理念のもと、低学年キャンパスでは、生き生きと学習する子どもたちの様子や笑顔が見られ、とても印象に残った。

井口　将夫・・・・・・・・・北京市光明小学が中国の子どもと接する初めての機会となった。1 年 3 組の授業風景を見せてもらい、とても姿勢がよく大きな声ではっきりと詩の暗唱していることに感心した。先生の声かけに 1 人の男の子が立ち上がり、「こんにちは」と挨拶をしてきた。
自分のクラスの子どもたちが作った折り紙を 1 年 3 組にプレゼントさせてもらったが、やはり折り紙を見る子どもたちのキラキラした目がとても印象的であった。初めて見る物、そして日本の子どもたちが作った物に興味関心をもったのではないかと感じた。
同校は道徳と健康の 2 つの柱で学校経営を進めていた。横浜の自分の学校でも同じように道徳、そして元気に過ごせるように意識をして教育を行っている。

合肥市屯溪路小学校

［合肥市］ 5 月 18 日(木)

学校長：陳罡（CHEN Gang）
設立年：1958 年
児童数：約 3,200 名　／　教員数：170 名

卓球クラブの児童と卓球を楽しむ日本教職員

合肥市屯溪路小学校は 1958 年に創設され、「博学で高雅な教育」という教育理念を確立している。さらに、「独立・探究・担当・平等・愛・自由」の 6 つの教育テーマを教育重点項目に掲げて教育活動を行っている。とりわけ、読書教育に力を入れている。「図書館に位置する学校」という読書の環境づくりに力を尽くし、学級文庫や学校内に図書コーナーを設置している。教員と児童が読書を身近に楽しめるよう、環境づくりをしている。

◆授業見学
○卓球クラブの見学
・1 日 2 時間、週 5 日練習を行っている。合肥市の卓球大会では、毎年上位 3 位に入賞している。
・入部希望者が多いため、希望者全員が入部することはできず、選抜を行っている。
・児童と一緒に卓球に取り組む日本教職員もいた。

○合唱団の見学
・2008 年創設。110 人のメンバーから構成されている。
・合肥市のコンクールで 5 連覇、中国全土のコンクールでは銀賞を受賞した。
・歌の技術だけでなく、協力することを教えている。

・合唱団から3曲の合唱のプレゼントがあり、「赤トンボ」の合唱が特に印象的だった。訪問団からもお礼に2曲披露した。

◆あいさつ・学校紹介

〇副校長の戴忠玲（DAI Zhongling）氏より学校紹介

・1958年に創設されて以来、教育の質を年々向上させている。博学を大切にしており、「独立・探究・担当・平等・愛・自由」を重点項目に掲げ、教育活動に日々取り組んでいる。

・英才少年になってほしいという想いのもと、様々なチャレンジをしてきた。例えば児童が自ら進んで学習に取り組むためのカリキュラムマネジメントや、学校独自で勉強グループを構成し、学びの共同体作りを行ってきた。

・日々の教育活動では、日本の教育学者である佐藤学氏の実践を参考にしている。『ひそかな革命』という著書には、教育活動を行う上での流れ(計画・活動、ふりかえり)や、総合的な発想がある。

・このような交流の機会に感謝している。

〇校長の陣罡（CHEN Gang）氏より

・「教員のチャレンジ」、「児童のチャレンジ」、「学校のチャレンジ」の3つのチャレンジがある。児童も教員も学校もチャレンジしながらホールスクールアプローチの視点で教育活動に取り組んでいる。

・教員のチャレンジでは、佐藤学氏の著書を必読図書とし、教育活動の発想のヒントを得てほしいと思っている。

・読書を大切にしている。

〇訪問団代表あいさつ

横浜市立永田台小学校　教諭　井口将夫氏

卓球に取り組む子どもたちから「真剣さ」や、合唱を奏でる子どもたちから「やわらかさ」を感じた。そんな子どもたちから感動を受け、教職員の質の高さも感じた。今日をきっかけに交流が深められたらと思う。

〇記念品贈呈

訪問団からは鳥獣人物戯画の巻物が、同校からは児童が作った絵本が贈られた。

◆教職員との交流会

テーマ：図書館の中の学校をつくろう

〇読書活動の意義と子どもが自主的に読書をする環境づくりの事例の紹介

・図書館は本を保管するだけでなく、情報センターとしての機能も果たしている。さらに、読書を推進・普及するための重要な場所である。近年では、タブレットの普及もあり、紙の本だけでなく電子資料もたくさん揃えている。

・読書環境づくりとして、学校図書館の図書の充実だけでなく、専任の司書教諭・学校図書館司書を配置している。さらに、保護者や地域の人々から学校図書館支援ボランティアを募り、朝の読み聞かせを行うことなど、地域との連携も推進している。

・4つのレベルの図書館づくりを目指している。まず、教室の外にあるバーのような図書カウンター。2つ目が教室に設置された学級文庫。3つ目が図書館で、4つ目は、児童がカバンの中に携帯している本である。このように、いつでも本が目の前にある、本のテーマパークのような学校づくりを目指している。読書の環境を整え、児童が読みたい本を自由に読むことで、まずは読書の習慣づけを行っている。そして、読書は子どもの心を育み、学力を伸ばす。

・図書館活動として、学校図書館支援ボランティアとして保護者が中心となり、様々な活動を展開している。例えば、物語グループを構成し、おすすめ図書を共有する活動を行っている。図書館での映画の鑑賞もできる。児童による図書委員会活動の活性化として、読書の啓発活動に取り組んでいる。読書週間の活動や本を作る活動もある。

・朝の読書の時間を確保し、毎朝10分間の朗読時間を設けている。低学年は、大きな声で音読・群読に取り組み、高学年は黙読に取り組むなど、読書活動が充実している。

〇低学年ブロックの読書活動についての事例紹介

・低学年では、児童が本に興味・関心をもち、継続して読書に取り組めるよう、読書の閲覧の指導に力を入れている。

・読書を通して閲覧能力を高めるために、毎日30分読書の練習を行っている。

・家庭との連携も大切にしており、保護者に継続

的に読書することの大切さを繰り返し、説明している。家庭に本棚を設置するように勧めている。さらに、家庭でも読書の習慣を身につけるよう、毎晩寝る前に本を読む習慣を身につけるよう学校からも話をしている。

・読書についての発表会を行っている。
・本の推薦も積極的に行っている。
・親子で絵本を作る活動も行い、創作絵本は、いつでもだれでも閲覧できるよう学校の本棚に並んでいる。
・児童は読書カードで何を何冊読んだか記録している。
・小学生は 5 万字以上読むと決められており、少ない児童でも 7 万字読み、多い子は 12 万字読んでいる。

○高学年ブロックの読書活動についての事例紹介

・4～5 月に必読図書である『三国志』を児童みんなで読む。読書の量などの差はあるが、個の実態に合わせて読書活動を推進している。
・読書量が多い児童は、言語力表現力が高い。能力を伸ばすため、さらに、幅広い種類の本を紹介し、関連する本や文学以外の本も読ませる指導の工夫を行っている。例えば、旅行の経験などを活かし、文学だけでなく地理的な知識も深める。読んだ本をもとに、演劇にも取り組み表現力も身につけている。このように読書からもっと豊かな生活や精神を育成できることが読書の大きな成果である。
・読書量の少ない児童は、教員が一緒に図書館に行き、興味ある本を選ぶことを支援する。読書感想文パンフレットを作って、お互いに読書を紹介する。伝え合う活動を通して、同じ興味のある子たちは一緒に演劇を行う。
・読書量の多い児童や面白い本を紹介すると、表彰され、パンをもらえる。このように児童に本を読む機会を与え、本に親しむ動機付けを行っている。

○質疑応答

Q：日本の学校でどのように読書を展開しているか。

A：勤務校である小・中学校では、10 分間朝読書に取り組む活動をしている。本は図書室と教室にあり、児童・生徒が自由に本を自分で選択して読む。音読は国語や社会など授業の中で読み、朝読書では、声を出さずに各自で静かに本を読む。中国では、朝読書で声を出して読むことを知り、興味をもった。声を出して読むことの意義を教えてもらいたい。

A：勤務校である中学校の取り組みでは、生徒が夏休みに本を読んで覚えてそれを発表する活動をしている。授業の時にお互いに評価し合う。その活動を充実させるために、生徒が選んだ本を必ず購入するようにしている。図書の本を生徒みんなで選び、本屋さんに来てもらって選定会を行うことで、生徒自身が本に興味をもち、主体的に本に関われるようにしている。読書の課題として、日本では、授業時数の確保が厳しく、どのように読書と学習・勉強のバランスをとるかが課題である。

Q：必読図書を設定し、同じ本を読む活動を行っているが、児童の興味が個々によって違う。どのようにすれば児童みんなが興味をもって本を読むことができるか。

A：勤務校である中学・高校の国語の授業の実践では、まず皆で 1 冊の本を読んで先生がカードを配る。カードの中には本の文があり、生徒がストーリーの正しい順になるように見せ合って並び替える。読んでいないとゲームに参加できないような仕掛けづくりはどうだろうか。

A：本への興味は個によってもちろん違うので、活動の中でみんなが楽しめるように工夫する。上海の日本人学校では、小学 1 年生から中学 3 年生まで一斉下校をしており、低学年は他学年と下校時間を合わせるため遅くまで残しておく必要がある。そこでその時間に図書の時間が設定されている。決められた時間に本を読む習慣があり、ボランティアが本の読み聞かせなどを行ってくれる。その活動の中から、読書に興味を持つ子が増えている。学校それぞれの事情に合わせて工夫をしていくことが大事である。

Q：スマートフォンが普及し、生徒の本を読む時間が減少している。読書に親しませるために工夫していることを教えてほしい。

A：スマートフォンは子どもだけでなく、大人の問題でもある。小学生は所持している児童はいないが、電子書籍図書を通して、読書するきっかけづくりを行っている。アプリを紹介

することもある。新しい図書機能がついているアプリの開発も学校独自でおこなっている。スマートフォンなどの電子機器は、どのように利用するかを明確にし、時間を必ず守って使うことが大切である。

（島ノ江　正浩・濱田　会美）

《参加者の感想》

古松　ゆり子・・・・・・・・・読書についての活動を重点的に聞いたが「図書館の中の学校を作ろう」という言葉が印象に残っている。行っている活動自体は、日本でも行っているものが多いが、それにかける時間や最後まで徹底的に行う姿勢が違うと感じた。また、学校の活動に保護者を巻き込む考えが強く、保護者も理解を示している。学校だけでなく、学校と家庭が連携し、子どもを育てていく考えなのだと感じた。課題点として挙げられた「読書と学習の両立」は、日本での課題点と同じであり、やらせたいこととやらなければならないことのバランスをとることは難しいと感じた。

島ノ江　正浩・・・・・・・・・様々な教育活動がとても積極的に行われているところに感心した。読書の大切さを学校全体で共有し、図書館を中心に読書を積極的に推進していくところに感銘を受けた。先生たちとの交流会でも意欲的に取り組まれている様子が伺えた。また、卓球や合唱の活動もレベルが高く、見学できて有意義な時間を過ごせた。

吉川　直和・・・・・・・・・小学生が体育の授業で卓球をしていた。私も高校で卓球を指導しているので、ラケットを持参して小学生と実際に対戦した。この学校の小学生は、放課後クラブ活動している日本の中学生、高校生と同じ実力があると思う。生徒の卓球フォームが全員すばらしいのは、卓球の専門家が熱心に生徒を指導しているからだと思う。

合肥市特殊教育センター

[合肥市]　5 月 19 日(金)

学校長：李長東 (LI Changdong)
設立年：1963 年
児童・生徒数：630 名　/　教員数：155 名

互いに質問し合う日中教職員

1963 年に創設された合肥聾唖学校が前身である。2002 年には、安徽省初の特別支援総合高校、2012 年 9 月に養護教育センター、2017 年 1 月には学齢期前の子どもを対象としたリハビリセンターが設立され、合肥特殊教育センターと改名された。同センターは、身体障害者向けのリハビリ教育、9 年間の義務教育、総合高等学校の機能を有し、聴覚障害・視覚障害・知能障害・重複障害の児童生徒を対象としている。

◆歓迎レセプション

○校長の李長東（LI Changdong）氏よりあいさつ
本校は安徽省の特別支援教育の拠点であり、630 名の児童生徒、155 名の教職員が在籍している。これまで、米国、オーストラリア、カナダなどと交流をしてきた。今回、訪問先として選んでいただき光栄である。文化・友好交流の架け橋となりたい。

○訪問団代表より挨拶
千葉県立特別支援学校市川大野高等学園
教諭　加藤　健次郎
日本で特別支援学校の教員をしている。働く力を身に付け、社会に出るための教育を実践している。本日は熱烈歓迎に感謝している。

○記念品贈呈
訪問団からは鳥獣人物戯画の巻物、同校からは切り絵の巻物が贈られた。

○児童生徒による公演
1. 民楽合奏『春苗』、『荷塘月色』
2. 武術『功夫扇舞』
3. ピアノ独奏『随想回旋曲』
4. 歌曲『北国の春』
5. 歌曲『蘭亭序』　訪問団から児童生徒へ
6. 舞踊『夢の綉』

○記念写真
舞踊を披露してくれた生徒と一緒に記念写真

◆学校見学
○校史館
同校の機能や歴史について説明を受ける
○教員および児童生徒の書画展示館
同校の教員や歴代の児童生徒の作品を鑑賞
○按摩師養成のための授業
○美術スケッチ
○切り絵
○国語科の教員の職員室見学

◆学校紹介および教職員
○プロモーションビデオ鑑賞
学校紹介のプロモーションビデオを鑑賞し、同校の概要を学んだ。

○教職員交流会
Q：教員はこの学校で勤務をするにあたり、特別支援教育をどのように学んでいるのか。
A：教員毎に異なる。大学で特別支援教育を学んだ者、大学卒業後トレーニングを受けて赴任した者、同校でトレーニングを受けている者がいる。学校内にも特別なトレーニングプログラム（研修）がある。
Q：一般校との交流はあるのか。
A：融合性を大切にしている。共同授業や相互に訪問を行っている。
Q：日本でも一般校との交流はあるのか。教員に対して要求や期待はあるか。教員が気を付けることはあるか。
A：日本も交流教育に力を入れている。相互に訪問している。中心にいるのは常に子どもである。親や会社の要求よりも子どもが何を必要とするかを大切にしている。
①自己理解→②自己選択→③自己決定
子どもたちは生涯学校で生きていくのではないため、将来の生活（社会性）のための力を育てる。
Q：黒柳徹子氏の著書『窓ぎわのトットちゃん』を知っているか。日本では重複障害をもつ児童･生徒への方策はどのようになっているか。
A：『窓ぎわのトットちゃん』は日本でも知られている。重複障害をもつ児童・生徒への対応については、学習指導要領＋特別支援学習指導要領に沿って行う。授業研究･検討会を行い、情報交換し、方策を検討している。訪問教育を行うなど、社会参加を重視している。
A：日本は盲学校、聾学校もあるが、特別支援学校はどんな障害の生徒も受け入れる。重複障害の児童生徒も特別支援学校で受け入れる。
Q：児童生徒の受入れ基準、学費について。
A：聴覚障害、視覚障害、知的障害の児童生徒を受け入れているが、基準は障害別に異なる。視覚障害は人数が少ないため中国全土から、知的障害は学校の近くに居住している児童生徒、聴覚障害の義務教育段階においては学校の近くに居住している児童生徒、聴覚障害の高校生については安徽省全域から受け入れている。学費は無料で対象者は誰でも入学できる。貧困家庭には補助金制度がある。

○校長の李氏より終わりのあいさつ
「教育は生活、生活は教育」
グローバル時代の今､日本でも同じだと思う。子どもが自覚して、自主的に、自立的に学ぶことが本当の教育である。まだまだ交流したいことがあるが時間が足りない。これからも日中の交流を続けていきましょう。

（加藤　健次郎・小畑　幸一）

《参加者の感想》
濱田　会美・・・・・・・・・児童・生徒たちは日本人の私たちに関心をもってくれた。交流での歓迎の踊りでは、手の込んだパフォーマンスを見せてくれた。

児童・生徒が作った切り絵をいただいた。2 学期以降、本校でも切り絵に挑戦し、切り絵を通じてこれからも中国と本校との交流ができたらいいな、と思った。

ヤマダ　キヨコ　ベッティー・・・・・子どもたちの素晴らしい演奏会が鑑賞出来ました。
学校見学で様々な活動を見せてもらった時には、教師たちが一生懸命指導して子供たちが持っている無限の力を発揮できるようにしていると思いました。
教職員との交流では聞きたいことがたくさんありましたが、時間が足りませんでした。今後あちらの先生とメールでやり取りをする予定です。

今村　羊生文・・・・・・・・・まず驚いたのは、学校に到着した私たちを生徒の皆さんが、道に立って会場まで誘導してくれたことである。さらに、体育館には全校生徒が集い、拍手をもって出迎えをしてくれ感動した。一人ひとりの名前が書かれた座席が用意されおり、ステージでは生徒たちが発表のための準備をしていた。明瞭で聞きやすい司会の先生の言葉に、手話の通訳が行われており、全員にしっかりと言葉を伝え理解させようとする姿勢を感じた。
生徒たちの合奏、中国伝統の舞や武術、ピアノ独奏はどれも一生懸命に取り組まれており、質も大変高いものであった。ステージの準備や片付けも生徒たちが行っており、互いに支え、ともに文化を創り出す素晴らしい機会と場であった。生徒たちの按摩や切り絵などの技術指導教育の現場を見学できたことも興味深かった。高度な手仕事を身に着けて、社会に出ていこうとする彼らの真剣な表情がそこにあった。生徒が作った切り絵の作品は、職場の机に飾り、見るたびに彼らのことを懐かしく思い出している。
日本においても中国においても、心身の障がいを抱える児童生徒への支援は大切な課題である。自らの可能性を開花させることが、教育の原点であることを改めて確認させてくれる現場であった。

桑原　昇・・・・・・・・・職業訓練だけでなく、芸術や伝統文化に重きを置く教育方針が印象的であった。展示されている作品や歓迎セレモニーでの出し物などは、非常にレベルが高かったと思う。児童生徒の社会的自立を目指すだけでなく、心の豊かさを育もうとする教育方針の素晴らしさを実感した。

佐久間　勇史・・・・・・・・・踊りや演奏など生徒の発表が素晴らしかったです。そのような素晴らしい発表の陰には、指導にあたっている先生方の熱意と苦労が感じられました。時間が許せば、指導のノウハウを教えていただきたいと思いました。

佐野　純・・・・・・・・・まず非常に大きな施設であったことに驚いた。教育における特殊なニーズというのは、どこであってもやはり一定数以上必要なのだと感じた。ここでは、基礎学力よりも芸術や職業スキルのようなものに比較的力を注いでいるように感じられ、より人間的でバランスが良い印象を受けた。『窓ぎわのトットちゃん』が話題にのぼったことも興味深く、訪問団の一人の先生が「自己理解、自己選択、自己決定を大切にし、将来の生活のための力を育てる」というお話が特に印象的で、特殊教育に限らず、教育全体にとって非常に大切な視点であると改めて思った。

小畑　幸一・・・・・・・・・歓迎レセプションで生徒公演鑑賞を行った。支援が必要な生徒が、努力と工夫により芸術的な才能を発揮していた。就学前から高校までの生徒が在籍し、一貫して教育を進める施設で、芸術や国際交流に力を入れている。少数ではあるが、卒業生に芸術分野の大学への進学者もいる。

合肥市第八中学
（高等学校訪問）

[合肥市]　5 月 19 日(金)

学校長：王建明　(WANG Jianming)
設立年：1956 年
生徒数：5,300 名　/　教員数：400 名

ブロックのロボットを操作する生徒ら

合肥市第八中学校は 1956 年に創立され、2008 年に広大なキャンパスを有する現在の場所に移転した。約 5,300 名の生徒が在籍し、3,000 名が寮で生活している。学校の目標は「生徒の自立」「自立する精神の育成」「イノベーション能力の育成」の3つである。多くの優れた人材を輩出しており、現在の国務総理（首相）李克強氏の出身校でもある。

近年、国際協力を新しい発展戦略と位置付け、国際部を創設。諸外国との幅広い交流活動を行っている。自らの学校を「先進的な設備、すばらしい教員、科学的な管理、優れた品質、個性と特徴がある国際的な学校」と認識している。

◆到着・昼食

合肥市第八中学に到着後、副校長先生から教職員専用の食堂に案内され昼食をとった。食堂の営業時間は朝 6:30～8:15、昼 11:30～12:30、夜 17:30～18:30 である。食堂のカウンターには多くの品数が並び、その反対側に食事をするためのテーブルと椅子が配置されている。各自が一列に並びカウンターからトレーに料理を取る。トレーからあふれる程の品数と、料理のおいしさに大満足であった。

◆校内見学

○学生寮・購買部の見学

食堂のすぐ裏にある 4 棟の巨大な 18 階建ての学生寮は、女子 2 棟、男子 2 棟に分かれており、合計 3,000 名の生徒が生活している。男子寮は一部屋を 5 人で使用している。各自のスペースは独立しており、ロフトベッドの下に机や私物が置かれている。見学した時間帯は昼休みで、昼寝をしている生徒の姿があった。廊下や部屋のドアには万国旗や生徒による張り紙やイラスト、ポスターや優秀な成績を修めた際に貰う表彰状などが張り付けてある。掲示板には「免疫予防」「校国安全」などとチョークで書かれており、生活感あふれた空間である。

購買部は日本の大学の生協のようで、文房具、書籍、大学の入試問題集などが販売されている。外国の文学作品も取り扱っており、村上春樹や川端康成などの著作も翻訳され販売されていた。

○国際部棟の見学

米国の大学進学を希望する生徒が学ぶための校舎で、ここで学んだ全ての生徒が米国のトップ 50 位内の大学への進学を決めている。国際部では、米国の教材を使用して学習している。また、国際部の教員は中国人教員他、米国人教員が指導している(他の学部では中国人教員のみ)。中国国内で米国の大学入学試験を受けることができる。

1 階は資料展示室となっており、歴代の校長の肖像画が並べられ、彼らが今もこの学校を見守っていることを感じさせる。学校の歴史に関するパネル、男女の夏と冬の制服を着たマネキン、有名大学に進学した生徒の顔写真、学校の名誉となる表彰状などが力強く展示されていた。中国では優秀な人物を皆の前で表彰する文化があり、学校自体も自らの功績をアピールするものとなっている。

◆教員交流会

○校長の王建明 (WANG Jianming) 氏あいさつ

私たちの学校は日本の学校との交流、また生徒同士の交流も行っています。この学校には訪日交流に参加した教員も勤めています。また日

本企業からの財政的な支援もいただいており、私自身はもっと交流活動を積極的に行いたいと思っています。

昨年、創立60周年を迎えました。以前のキャンパスは町の中にありましたが、2008年に現在の場所に移転し、現在5,300名以上の生徒と400名の教員が在籍しています。生徒の数が多いのでイベントは大規模になります。合肥市内から優れた学生が集まっています。多くが有名な大学に進学し、最近は海外の大学に進学する生徒が増えてきています。米国を中心とした、英語圏の学校が多いですが、一部は日本の大学に進学する人もいます。そして大学院進学の際に中国に戻ってくることもあります。

この学校では生徒と教員の幸福な発展を目指しています。また読書も大切にしています。読書は人生に影響を与えますので、一定の量を読ませています。また小学校、中学校、高校までは健康な体が必要となりますので、必ずスポーツをすることになっています。運動とスポーツが習慣になるように指導しています。

教育の情報化を進めています。近代化した設備を導入して、個性的な学習ができるようにしています。教員は生徒一人ひとりの個性を大切にして向き合っています。昔は統一的な授業がよく行われていましたが、情報化の手法をもって教員同士が情報交換し、個性的な授業をしています。視聴覚の点でもこれから検討を進めていきたいと思っています。

○訪問団代表あいさつ

奈良市立一条高等学校　教諭　吉川　直和

本日訪問させていただきとても嬉しく思っています。私の学校には2名の中国からの留学生がいます。私はいつも彼女らを探し、交流しようとしています。本日は多くの中国の方と交流できるため、彼女らを探す必要がありません。歓迎していただきありがとうございます。

○記念品交換

訪問団からは国宝「鳥獣人物戯画乙巻」のレプリカを、同校からは生徒の制作した版画が贈られた。

◆各クラブ・心理相談センター見学

毎週水曜日の午後にクラブの時間があり、70もの選択コースが用意されている。

○茶芸クラブ

茶道の美しい衣装をまとった女子生徒たちが、2人組で中国の伝統の茶芸を披露してくださる。音楽が流れる中、凛とした姿勢で一つひとつの作法に集中して取り組んでいた。訪問団一人ひとりに美味しいお茶が振る舞われた。

○ロボットクラブ

世界ロボットコンテストでも優勝したことのあるクラブで、8名の男子生徒たちが拍手で日本の教職員を迎え入れてくれた。

設計と組み立て、操作までを部員たちで行い、見事なロボットファイトを見せてくれた。はじめはブロックで作った機械で、箱の中にあるものを自由自在に移動させていた。次は大きなボールを持ち上げて高いところに置く機械を見学した。最後は機械とは思えないスムーズな動きで相手の陣地に布団のような柔らかいクッションとスターと呼ばれる障害物を押し込みあう、激しいロボットファイトを見学した。まるで意思をまとった生き物かのようにロボットが自由自在に生徒のコントロールにより動いていた。生徒たちは全身に汗をかきながら精一杯素晴らしい技術を披露してくれた。私たち日本の教職員が部屋から立ち去ると、大きな歓声が上がっていた。きっとお疲れさまとお互いを称え合っていたのだろう。

○心理相談センター

眺めの良い建物の上層階に位置する心理相談センターは日本でいうカウンセリングルームである。ここは在校生だけでなく、合肥市民にも開放されており、多くの人が利用しているそうだ。入口には専任のスタッフのデスクが並び、その奥にゆったりとした相談室が並んでいる。穏やかな気持ちで話ができるようぬいぐるみのクッションが置かれていた。さらに体の緊張をほぐすための機械や、箱庭療法の部屋、青く柔らかいプラスチックで作られた人形を思いっきり殴ってもよい部屋なども用意されていた。怒りを抑圧するのではなく、発散する発想のシス

テムがあることが新鮮だった。6 月に大学入試が控えているため、5 月と 6 月に最も多く利用者が来るそうだ。心理相談センターの充実した設備と規模の大きさに圧倒された。

◆教員ラウンジでのお茶と歓談のひと時

教員専用のラウンジでおいしいコーヒーとお菓子をいただきながら、副校長の趙林(ZHAO Lin)氏らと談話の時間をもった。趙氏との談話は以下の通りである。

多くの場合朝 7:30～22:00 まで勤務しています。私は特に心理相談センターの責任を担っており、ストレスを感じることがあり、時に発散したくなることもあります。でも、ここは優れた生徒が多いので、ほかの学校よりは恵まれているのかもしれません。私たち中国も日本も学校教育の面では共通する部分がたくさんあると思います。私から皆さんに質問してもよいですか。

Q：日本の高校入試では、選抜試験はありますか。

A：基本的にあります。お金に余裕のある人は私立の学校に進学する場合もあります。

Q：高校を卒業したらどのくらいの人が大学に進学するのですか。

A：今はおよそ50パーセントの人が大学に進学しています。徐々に進学率は上がってきており、特に私立の大学が増えたことによって一気に進学率の向上に拍車がかかりました。

Q：教員は公務員ですか。

A：公立校の教員は都道府県や政令指定都市の公務員になります。私立の教員は公務員ではありません。

Q：教員の給料はどうですか。

A：高いところもあれば、低いところもあると思います。特に私立にはそのような傾向があります。大学付属の学校は給料が高くなることがあります。私立の教員は学校の授業だけでなく、塾や学校訪問、学校相談会など学校経営のための営業活動をすることもあります。

○記念撮影

最後に校門前で記念写真を撮って、同校を後にした。

（今村　羊生文・岡本　英明）

《参加者の感想》

八木　翠・・・・・・・・海外の大学を受けるための学科があることに驚いた。日本では、高校生の段階でそこまで先を見据えて学科選択をしている人は少ないのではないかと思う。
ブロックや、ロボット、お茶などのサークル活動があり、各自で選択して履修している。ロボットクラブの生徒に聞いたところ、1 日に 3、4 時間活動していると言っていて驚いた。それだけ没頭できる環境にあるのは恵まれていると思った。

久次米　晶文・・・・・・・・校内に心理相談室が設置されていた。その中に、日本ではあまり見られないような、ソファに座りゆったりとした環境で音楽を聴く部屋であったり、機械に向かって大声を出したり人型のサンドバッグが置いてある部屋もあり、生徒のストレスをケアする環境が整っていた。有名な進学校ということで、勉強や受験の悩みが多いのかと思っていたが、悩みの多くが友人や家庭での人間関係についてということで、日本と共通するところがあると感じた。

大栗　真佐美・・・・・・・・茶芸などの伝統文化だけではなく、ロボットサークルなどの活動は世界の潮流であり、現代の課題にも秀でていて、それぞれの生徒が自分の得意分野を伸ばしていることがわかった。また、学校の教員食堂での昼食、寄宿舎見学を通して生徒たちの日々の一端を垣間見ることができたことは大きな成果である。また、町の心理相談を請け負っているということで、ホットラインもあり、施設も整っていた。
所見：優秀な学校であるので、大学受験（高考）の対策もしっかりしているのだろう。大学進学についても中国だけではなく、世界へ進学していることもわかった。心理相談の町の拠点となっていることは他の学校にとっても心強いことだろう。

岡本　英昭・・・・・・・・学生寮があり、各部屋には下に学習机、上がベッドになったものが片側に 3 つ、合計 6 つ備え付けられている。親元を離れ、学業に邁進している姿を目の当たりにし、中国の学業に対する厳しさを実感した。また、全天候型のグラウンドや本屋、コンビニも併設され、日本の大学の雰囲気を感じた。施設が整っていることに驚いた。

合肥市第五十中学
（中学校訪問）

[合肥市]　5 月 19 日(金)

学校長：江涛（JIANG Tao）
設立年：1975 年
生徒数：6,955 人　/　教職員数：376 人

芸術祭で生徒の声援に応える訪問団

東・西・南・新キャンパスの 4 つのキャンパスを持つ非常に大きな中学である。今回訪れたのは、新キャンパスである天鵝湖キャンパスで、2010 年に建てられ、合肥市蜀山区翡翠路に位置している。

民族的で世界的にも活躍できるような生徒の輩出を目標として、教育に対する大きな愛のもとで、学習過程を重視しながら学生の素質向上と教員の能力向上に繋がるためのプログラムを実施している。

中学・高校の 6 年間をかけて、学生の興味に合わせたプログラムを通じ、将来への意思を強め、常に恩返しの心を持たせるような調和の学校、平和な学校作りを行なっている。

また、毎年、「芸術祭」「図書祭」「千人植え」「思春期の教育」「科学技術革新競争」「少年模擬法廷」などの学校行事や模擬国連大会への参加、豊富なサークル活動などを通して、生徒が成長できる楽園としての舞台の役割を担っている。

◆歓迎レセプション

○校長の江涛（JIANG Tao）氏よりあいさつ

日本から遥々お越しいただきましてありがとうございます。中学、高校での交流は協働的な教育の取り組みとして、また、日中の友好関係を築く上でも非常に大きな意義を持っています。さらに、青少年交流を行う上で、教員は大きな役割を担っています。これからのグローバル化の時代に向けて、協働化を図っていけるように今後とも交流を進めて参りましょう。

○訪問団代表あいさつ

京都教育大学附属桃山中学校
教諭　大栗真佐美氏

今回、合肥市第五十中学を訪問することができて感激しています。本日は芸術祭を見学させて頂くことができるということで、大変嬉しく思っています。1986 年に私が中国に来た時、中国には悠久の歴史があることを知りました。今回初めて合肥市を訪問しましたが、とても綺麗なところだったので、合肥市が好きになりました。今回の訪問をきっかけに中国との交流を深めていきたいと思います。

○記念品贈呈

日本訪問団からは縮小絵巻物の贈呈、同校からは学校のオリジナルカレンダーが贈呈された。

◆芸術祭鑑賞

芸術祭では日本訪問団は学校の芝グラウンド会場にて、生徒による盛大な歓迎の中、ゲスト紹介、さらにはステージで歌の出し物を披露させて頂くことができた。会場と一体となったステージ上での時間は 1 つの歌を通して、国境や言葉の壁に 1 つの大きなアーチが架かった瞬間でもあった。芸術祭の式次第は以下の通りである。

1. 来賓紹介
2. 校長江涛氏より開会宣言
3. 美徳学生賞、美徳教師賞、美徳保護者賞の表彰
4. 有志の生徒による演奏や出し物（放課後自主的に練習）

※4. の演目の一つとして、訪問団より歌の出し物を披露

芸術祭では日本教職員訪問団は学校の芝グラウンド会場にて、生徒による盛大な歓迎の中、

ゲスト紹介、さらにはステージで歌の出し物を披露させて頂くことができた。会場と一体となったステージ上での時間は１つの歌を通して、国境や言葉の壁に１つの大きなアーチが架かった瞬間でもあった。

最後に、7･8年生の生徒や教職員に見送られて、合肥市第五十中学の訪問を終えた。

（佐野　純・山崎　一以）

《参加者の感想》

小田　歩・・・・・・・・・学校で行われていた文化祭に参加させていただいたことが印象的です。広大な敷地に広がるグラウンドは圧巻で、それぞれの生徒が得意なことを披露するという場面では、眼が輝いていました。お礼の歌を聞いてくれた生徒たちの反応が本当に嬉しくて忘れられません。帰りがけに、ある男子生徒が駆け寄ってきてくれ、「僕は将来東大に行く」と話してくれました。積極性にも心を打たれました。

大栗　真佐美・・・・・・・・・中学校の古典教育について具体的に知ることができた。また、芸術祭の発表のため、生徒たちが放課後グループ活動で様々な催しを計画し、取り組んでいることがわかった。それは京劇や舞踊、展示として書道などの歴史ある素晴らしい中国の伝統文化であり、中国政府の推進している中国の優秀な伝統文化を学ぶということに合致し、生徒たちがしっかりと学び継承していることがわかった。
所見：ハード面である校舎、校庭もとても大きく、学習環境が整っていることが伺えた。

山崎　一以・・・・・・・・・年に１回の芸術祭という１つの学校文化の集大成を鑑賞する機会を与えて頂いたことが大きな財産となりました。芸術祭の中で、「美徳学生賞」、「美徳教師賞」、「美徳保護者賞」という表彰の機会があり、生徒だけでなく、保護者や教員も含めて模範の人格形成を求めているところに、これからの未来の教育を担う人材育成のための地域、学校、家庭が一体となった取り組みの一端を伺うことができました。生徒有志の演技・演出など、非常に質の高いものが多く、自主的に行動することの意義の重要さを認識することができました。また、日本教職員訪問団としてゲスト席にお招き頂いた後、ステージで拍手喝采の中、歌を歌う機会があった瞬間は国境を越えて一体となった臨場感を感じることができました。

上海市甘泉外国語中学校（中学校・高等学校訪問）

[上海市]　5 月 22 日(月)

学校長：劉国華（LIU Guohua）
設立年：1954 年
生徒数：約 1,500 名　教員数：約 200 名

生徒のインタビューに答える訪問団員

1954 年に創立した公立の中高一貫校であり、海外留学生受け入れ資格を持つ上海市の対外交流の窓口である。1972 年に上海市では最も早くに日本語カリキュラムを開設し、市内で唯一の日本語を第一外国語とする学校である。日本、韓国、ドイツ、アメリカ、フィンランドなどの約 40 の学校と姉妹校の関係を結んでいる。

◆授業見学および生徒との交流

学校到着後、高校１年生の日本語の授業を見学し、生徒と交流する時間をもった。内容は以下の通りである。

○クラス：高校１年生日本語クラス
○内容：インタビュー時の言葉の使い方、マナー
○教材：グループ発表記録表、プレゼンテーションソフト

○方法：身近な話題、文化、生活、趣味などを通して日本語を用いて会話練習をしていた。訪問団がインタビューされる側となり、日本語で15分間対話をした。

◆学校見学

○Learning Innovation Center

創造意欲を高めることを狙いとして、キッチン、本棚、リラックススペースを中心とするLearning Innovation Centerが設定されている。このスペースは生徒が自由に使用することができ、リラックススペースとして使用されている。

○屋上ガーデン

屋上はイスや机、花壇などが設置されており、リラックススペースとして使用されている。生徒は学校の開いている時間は自由に使用することができる。また、バーベキュー設備も整っており、屋上でのバーベキューパーティーが開かれることもある。

○日本語図書コーナー（日系企業による寄贈）

日系企業の提供を受け、日本語で書かれたさまざまな書籍が用意されている。又吉直樹著『火花』などの最新の小説が用意されているだけでなく、マンガ本やビジネス書も多数用意されている。

○同時通訳訓練室

国際会議などで実際に使用される同時通訳ブースが用意されており、模擬的な通訳指導を行っている。なお、通訳指導においては独自に編集したテキスト（初級・中級・上級）を使用している。テキストは実際の政治家や指導者のスピーチ原稿が掲載されている（ちなみに中級テキストには安倍晋三首相の70周年談話が採られている）。

○日本家屋

日本文化の教育として、茶道を教えている。本格的、伝統的な日本家屋が用意されており、生徒はその家屋にて茶道の学びをする。

校内見学には、9月から日本の大学への留学が決まっている高校3年生の生徒が同行した。

◆意見交流会

○校長の劉国華氏によるあいさつ

本校は「民族的な感情　国際的な視野」の理念を中心に、45年間日本語教育を行ってきた。日本と中国の国交正常化と歴史を同じくする。日本語を基盤としての日本と中国の交流を行ってきた経緯がある。

本校には日本語を中心に学ぶ生徒が500名いる。第二外国語として日本語を学ぶ生徒は1,000名に上る。これまで、数百人の学生が留学生として日本の大学へ留学してきた。奨学金や学費免除の許可を得る学生もいる。西安交通大学のような国内有数の大学へ進学する生徒もいる。

私は日中の人々の友好には、青年同士の友好が重要となると考えている。日本語を学んでいきながら、素の日本や素の中国を理解していくことが、両国の青年同士の交流のために重要である。

○質疑応答

Q：通訳のテキストは誰がどのように作ったか。

A：本校の教員で編集したもので、現在は学内だけでの販売だが、いずれは出版し、流通させたい。

Q：日本の先生らと交通大学を訪問する予定があるが、甘泉外国語中学にも訪問が可能か。

A：来ていただいて結構です。来校の予定をあらかじめ知らせてほしい。

（高野　慎太郎・吉川　直和）

《参加者の感想》

ヤマダ　キヨコ　ベッティー・・・・・授業に参加でき、生徒と自由に話し合い、学校のことだけではなく中国の若者達の生活について色々と教えてくれました。ここでは言葉の壁がなく、中国語ができていれば他の訪問先でもいっそう親密になれたと思わされました。

加藤　健次郎・・・・・・・・子どもたちの日本、日本語に対する関心の強さに驚きました。そして殆どの子どもたちの日本への興味をもつきっかけとなったのが、日本のアニメという驚きでした。

日本のアニメは有名だと聞いてはいたものの、直接そのことを子どもたちから聞き衝撃を受けました。日本のアニメについて、私自身日本人としてもっと知りたいと感じました。
先生方の授業の進め方が技術的にもとても高く勉強になりました。聞く授業ではなく、常に生徒たちの心・頭に響くような質問を投げかけ、生徒同士の意見を混ぜ込むようにして授業を進めるやり方素晴らしかったです。

高野　慎太郎・・・・・・・・中国における日本語教育の実際を知ることができた。印象深いのは施設の充実ぶりである。たとえば、“Learning Innovation Center”という施設は創造意欲を高めることを狙いとして、キッチン、本棚、リラックススペースとして設置されており、このスペースは生徒が自由に使用することができる。また、「屋上ガーデン」はイスや机、花壇などが設置されており、生徒は学校の空いている時間は自由に使用することができるようであった。「日本語図書コーナー」は日系企業の提供を受け、日本語で書かれたさまざまな書籍（又吉直樹著『火花』などの最新の小説が用意されているだけでなく、マンガ本やビジネス書も多数）が用意されていた。「同時通訳訓練室」は国際会議などで実際に使用される同時通訳ブースが用意されており、模擬的な通訳指導が行われるようであった。また、日本文化の教育として、茶道を教えるための本格的、伝統的な日本家屋が用意されており、生徒はその家屋にて茶道の学びをしていた。
効果的な学習を生み出すためにはこうした学習環境を整えることが大変重要であると気づかされた。見学した上海市甘泉外国語中学は設備に大変多くの資金が投入されていることが容易に予想される。日本においても、やはり教育予算の確保は重要事であると痛感させられた。